

## 第 2 章 地域支援の成果

### 第 1 節 各地域での支援活動

平成 23 年度は、平成 22 年度に引き続き、デリバリー方式による地域支援活動を継続して行った。本年度は、昨年度活動した地域の中で、さらに連携を深めながら、今後の活動の展開が見込まれる鹿児島県内 4 箇所（伊佐市、枕崎市、霧島市、鹿児島市）を対象地域とした。

昨年度の支援活動の形式は、事前に地域のニーズを汲み上げ、それに応じた講演を行うという講演会形式であったが、本年度は昨年度と同様の講演会形式に加え、事例検討会形式での支援活動も試みた。

また伊佐市においては、単発の支援ではなく、「地域における虐待への支援」というテーマの下、参加者の理解をより深めることを目的とし、2 回の支援活動（講演会および模擬事例検討会）を行った。

支援対象は、昨年度までは地域の対人援助の専門家に限定していたが、本年度は対人援助の専門家に加えて、地域で対人援助のボランティアに関わっている学生を対象とした地域もあった。

実際に参加した対人援助の専門家の活動領域は、各地域によって異なっていたが、昨年度に引き続き、医療、福祉、教育、行政と多岐に及んだ。

支援活動全体の参加者数は、昨年度の計 309 人を大幅に上回る計 481 人であった。  
本節では、各地域での支援活動の概要および成果について報告する。

平成 23 年度 地域支援活動一覧

対象地域	日 時	支援形式	参加者
鹿児島市	平成 23 年 5 月 28 日	講演会	115 名
伊佐市(1)	平成 23 年 7 月 5 日	講演会	153 名
伊佐市(2)	平成 23 年 10 月 25 日	模擬事例検討会	62 名
霧島市	平成 24 年 1 月 31 日	講演会	87 名
枕崎市	平成 24 年 2 月 21 日	講演会、事例検討会	64 名

## 鹿児島市における支援活動

**日 時：**平成 23 年 5 月 28 日（土） 14：00～15：30

**演 題：**発達障害とその対応

**講 師：**平川忠敏教授

**会 場：**共通教育棟 3 号館 3 階 331 号教室

**参加者：**115 名（発達障害児とその家族へのボランティア活動に興味のある大学・短期大学・専門学校の学生）

**主 催：**日曜学級運営委員会

**共 催：**鹿児島大学大学院臨床心理学研究科

**後 援：**南日本新聞社

**同行専任教員スタッフ：**安部恒久研究科長，土岐篤史プロジェクトリーダー

**同行事業スタッフ：**上原美穂特任助教，川口智美非常勤臨床心理士，山下明子事務補佐員

### 支援活動の概要

本講演会は発達障害児とその家族へのボランティア活動を継続的に実施している「日曜学級」の活動紹介および発達障害に関するオリエンテーションという位置付けで行われた。日曜学級の活動拠点が鹿児島大学内にあるとのことで，本講演会も鹿児島大学内での開催となった。

講演会の冒頭に鹿児島大学長吉田浩己が挨拶を行い，その中で鹿児島大学を挙げて，地域支援活動を行っている学生をサポートしていくとの考えを述べた。引き続き，土岐プロジェクトリーダーから参加者へ地域支援プロジェクトの活動についての紹介を行った。

その後，「発達障害とその対応」という演題の下，平川教授が日曜学級における発達障害児への対応について講義を行った。日曜学級では，発達障害児・者自身に変化を求めるのではなく，サポート側である自分たちが変わること，発達障害児・者が生きやすい環境を作ることができるという理念に則って活動しており，活動の中で一番成長すべき存在はサポート側であることが述べられた。参加者にはボランティアを始めたばかりの学生が多かったが，熱心に聞き入っていた。

また本講演会の準備および当日の運営は，日曜学級に参加しているボランティアの学生にお願いする形となった。その積極的な活動ぶりから，地域に密着したボランティア活動の中で主体性や社会性が育まれていることが窺われた。

### アンケート結果概要 （詳細は巻末資料を参照）

#### 参加者

参加者は，大学・短期大学・専門学校の学生であったが，専攻別にみると教育関係が約半数であった。心理関係が全体の 5%程度，医療系が 7%程度であった。その他の理系の学生が約 15%もいた。教育，心理，医療といった対人援助の専門家を目指す以外の学生が発

達障害児・者の支援に携わることで地域支援の充実につながっていることが窺えた。

### 発達障害児・者に関わるボランティア活動の中で困ること

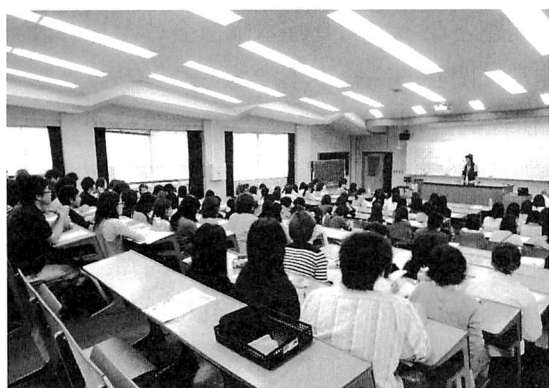
「自分の発達障害児・者への関わり方に自信がない」、「子どもがパニックになったときの対処法がわからない」といった支援の方法に関することや「勉強時間や就職活動時間の減少」といったタイムマネジメントが難しいと感じている学生が多くみられた。

### 発達障害児・者に関わるボランティア活動を続けるために必要と感じる専門家からの支援

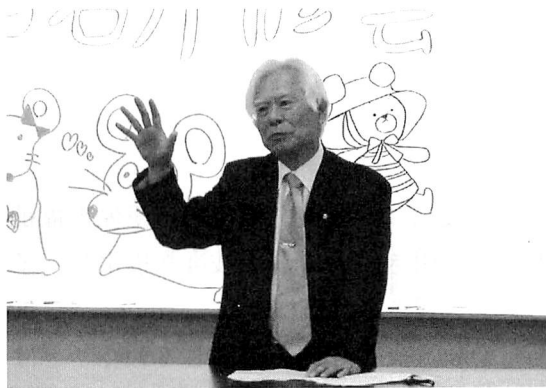
発達障害児・者への関わり方についてアドバイスを求める声が多かったのと同時に、専門家の立場から一般の人たちに対して、発達障害児・者への理解を促進する活動を行ってほしいという意見が挙げられた。

### 講演会の感想

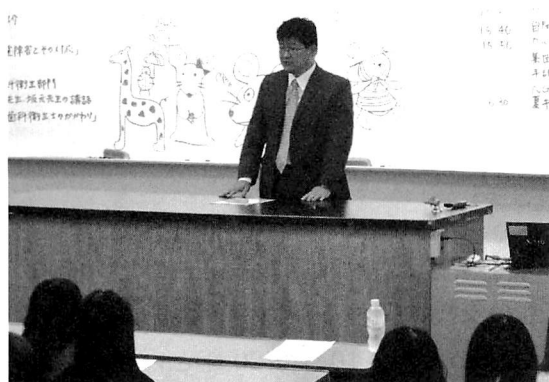
自閉症への理解が深まり、今後のボランティア活動が楽しみになったという感想が多数見られた。また「誰かの役に立ちたい、力になりたい」という社会貢献への意欲が高まったという感想が多かった。



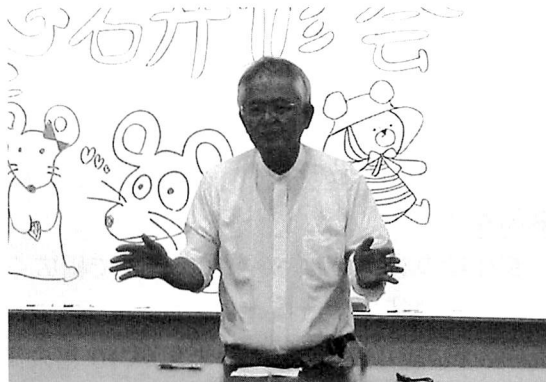
参加学生の様子



吉田浩己学長の挨拶



土岐篤史プロジェクトリーダーの説明



平川忠敏教授の講演

## 伊佐市における支援活動（１）

日 時：平成 23 年 7 月 5 日（火） 19：00～21：00

演 題：「子ども虐待」を知る

講 師：土岐篤史准教授

会 場：大口元気こころ館

参加者：153 名（保育士，幼稚園教諭，学校教員，歯科医師，保健師，臨床心理士，  
行政職員，施設職員など）

主 催：伊佐市福祉事務所

共 催：伊佐市教育委員会，鹿児島大学大学院臨床心理学研究科

後 援：伊佐市要保護児童連絡協議会，読売新聞西部本社

同行事業スタッフ：上原美穂特任助教，川口智美非常勤臨床心理士，山下明子事務補佐員

### 支援活動の概要

昨年度の本プロジェクトにおける「発達障害」に関する講演会に引き続き，土岐准教授による二回目の講演会である。今年度は，「子ども虐待」というテーマのもとでの講演会開催となった。昨今，「子ども虐待」は大きな社会的問題となっており，本講演会の参加者は150 人を超え，現場に従事している人々にとって非常に関心の高い事項であることが浮き彫りとなった。伊佐市外からも多数の参加があり，伊佐周辺地区の子ども支援に関わる人々の結びつきの深さも印象的であった。

まず最初に，会の主催である伊佐市福祉事務所の中馬節郎所長より，開会のあいさつを頂いた。引き続いて，土岐准教授より，子ども虐待の現状や虐待に関する基本的知識，虐待が引き起こされる様々な要因について 90 分間の講義が行われた。虐待されている子どもたちを救う支援体制を整備していくことは当然の義務であるが，虐待を行う大人の側にも多大なストレスがかかるなど，虐待を促進する要因が複雑に絡むため，親の立場や現状を理解し，気持ちに寄りそった支援が必要であること，そのためには親子が安心して参加できる「子育て支援」の場が重要になることが語られた。土岐准教授のこれまでの現場での体験やエピソードを交えた講義が展開され，どの参加者もとても熱心に講義に聞き入っておられた。

### アンケート結果概要 （詳細は巻末資料を参照）

#### 参加者

参加者の層は 20 代から 60 代まで幅広く，約半数を保育士，幼稚園教諭が占めた。その他にも保健師や学童指導員，臨床心理士など子どもの支援に関わる職種が多数集まった。現在の職業の経験年数は約半数が 10 年未満の方々であったが，10 年～20 年という人が 3 割弱，20 年以上の経験をもつ人が 2 割程度占めている。

参加者のうち、これまでに虐待問題に遭遇したことがあるかという項目には、3 割弱の方が実際に遭遇したことがあるという回答であった。

**講演会参加の動機の内容**

大半が職場などへの研修案内を受けて、研修テーマに関心をもった参加であったようである。その他にも子どもに関わる人が多い中で、虐待事例に対する対応や視点について学びたいというような声も多数見られた。

**「虐待」に関する知識の程度・理解の程度について**

今回実施したアンケートでは、土岐准教授が講演内容の中に盛り込んだ虐待に関する項目に関して、講演会の前後において、知識の程度、理解の程度を確認する項目をいくつか設けた。その項目とは、「虐待の 4 分類」「乳児揺さぶられ症候群」「代理ミュンヒハウゼン症候群」「虐待する親の要因」「DV」「子ども虐待と発達障害の関係」の 6 つである。

「虐待の 4 分類」「乳児揺さぶられ症候群」「虐待する親の要因」「DV」「子ども虐待と発達障害の関係」については、6, 7 割を超える人が講義前の時点で「よく知っている」か「ある程度知っている」との回答であり、講義後に関してもほぼ全員が「よく理解できた」「ある程度理解できた」との回答であった。

「代理ミュンヒハウゼン症候群」に関しては、「よく知っている」「ある程度知っている」と回答した人は 2 割程度にとどまり、8 割近い人が「知らない」という回答であったが、講義後には 9 割強の人が「よく理解できた」もしくは「ある程度理解できた」ようである。

**「虐待」問題に対応する専門職としての自信の程度について**

講義前には、「とても自信がある」「少し自信がある」と答えた人は、1 割強にとどまり、7 割近い人が「あまり自信がない」「全く自信がない」との回答であった。しかし、講義後には、「とても自信がある」「少し自信がある」と回答した人は 4 割を超え、「あまり自信がない」「全く自信がない」と回答した人は 3 割に減少する結果となった。

参加者の評価を「とても自信がある (5 点) → 全く自信がない (1 点)」として数値化し、講義前と講義後における参加者全体の自信の程度を t 検定を用いて比較したところ、講義前後において有意な差が認められ ( $t(131)=10.82, p<.001$ )、今回の講義を受けたあとには、参加者の専門職として対応する自信が講義前よりも高まったことが示された。

虐待問題に対応する自信の程度の比較				
	人数	平均値	標準偏差	t値
講義前	132	2.24	.98	10.82***
講義後		3.12	.97	

\*\*\*  $p<.001$

「虐待」に関する専門的知識やスキルの獲得に向けたモチベーションについて

講義前後とも 9 割を超える人が、専門的知識やスキルに関して「とても身につけたいと思う」「少し身につけたいと思う」との回答であった。

参加者の評価を「とても身につけたいと思う（5 点）→まったく身につけたいと思わない（1 点）」として数値化し、講義前と講義後における参加者全体のモチベーションの程度を t 検定を用いて比較したところ、講義の前後においては参加者のモチベーションの平均値には有意な差は認められなかった ( $t(142)=3.08, p=.759$ )。しかしながら、講義前後とも、平均値は高い値を示しており、参加者の虐待に関する専門的知識やスキルの獲得に向けた一貫したモチベーションの高さが窺えた。

知識やスキルの獲得に向けたモチベーションの程度の比較				
	人数	平均値	標準偏差	t値
講義前	143	4.45	.68	.308
講義後		4.47	.67	

気分に関する項目について

講義前後における参加者の気分の状態をみるため、気分に関する 9 つの項目（活気・緊張・のどか・そわそわ・やる気・不安・充実・動揺・平静）をアンケートの中に設定した。9 項目に関して、参加者の評価を「とてもそう思う（5 点）→全くそう思わない（1 点）」として数値化し、講義前と講義後における参加者の気分の状態について t 検定を用いて比較したところ、講義の前後において「緊張」( $t(145)=3.65, p<.001$ )と「動揺」( $t(146)=2.28, p<.05$ )の項目において有意な差が認められた。このことより、講義の前後で参加者の「緊張」感が和らいだ一方で、講義を受けた後には「動揺」する気持ちが高まったことがわかった。時間の経過とともに場の雰囲気にも慣れ、緊張感がほぐれていったと同時に、「虐待」という参加者にとってもシリアスなテーマが影響して、参加者の動揺する気持ちが講義後には強まったものと推測される。

動揺の程度の比較				
	人数	平均値	標準偏差	t値
講義前	147	2.29	.89	2.27*
講義後		2.49	.96	

\*  $p<.05$

「動揺」の程度の比較				
	人数	平均値	標準偏差	t値
講義前	147	2.29	.89	2.28*
講義後		2.49	.96	

\*  $p<.05$

### 「虐待」に関して身につけたい専門的知識やスキルの内容

講義前後ともに共通して見られた内容としては、実際に「虐待」ケースに遭遇した場合の対応や支援の一連の流れなどについて具体的に知りたいというものが多かった。また、「虐待」についての基本的な事項に関する知識なども、たえず求めているようである。

講義後には、講義からのみの学習にとどまらず、実際の事例を通した検討会なども行っていきたいという意見も複数見られていた。

### 講演会への満足度および感想

今回の講演会に対する満足度は非常に高く、「大変満足」「まあ満足」と回答している人で 9 割を占めた。日頃、「虐待」について学べる場はなかなか見られず、多くの参加者にとって学びのよい機会となったようである。また、土岐准教授の講義を通して、子どもや保護者に対する支援に関する気づきが得られたり、理解が深まったという声が多数見られた。加えて、参加者の学習意欲がさらに喚起されたようで、より具体的な話を聞きたいという意見や事例を通した学習会や今後も講演会を開いてほしいなどの意見も聞かれた。



伊佐市講演会の様子

## 伊佐市における支援活動（２）

### 模擬事例検討会

**日 時：**平成 23 年 10 月 25 日（火） 19：00～21：00

**講 師：**土岐篤史准教授

**会 場：**伊佐市子ども交流支援センター 笑（すまいる）

鹿児島大学大学院臨床心理学研究科スーパービジョンルーム 3

**参加者：**62 名（保育士，幼稚園教諭，教育関係者，保健師，臨床心理士，行政職員，施設職員など）

**主 催：**伊佐市福祉事務所

**共 催：**鹿児島大学大学院臨床心理学研究科

**後 援：**伊佐市要保護児童連絡協議会，読売新聞西部本社

**協 力：**株式会社コーネット

**担当事業スタッフ：**（伊佐市）上原美穂特任助教，川口智美非常勤臨床心理士  
（大 学）服巻豊准教授，山下明子事務補佐員

#### 模擬事例検討会概要

7 月に土岐准教授による子ども虐待の基本的事項に関する講演会が行われたが，今回の支援活動においては，その知見をベースとして，より実際の支援に向けた事例的理解を深めることを目的として，模擬事例検討会を行うこととなった。

検討会は，架空の虐待事例を想定してシナリオ作成を行い，市福祉事務所の職員を中心とした有志にお願いして，市福祉職員，市保健師，児童相談所職員，警察署員，施設職員，病院医師といった役割を振り，ロールプレイ形式による模擬の事例検討会議を行うという挑戦的試みを含めた。模擬会議に参加した各演者は，いずれも経験豊かな方々であり，役割に沿って架空事例に関する発言を行い，時にはアドリブも交えながら見事に演じていた。その他の参加者は，模擬会議の様子を聴衆として観察し，事前に配布されたチェックリストや相談受付票に記入を行いながら理解を深めていった。ロールプレイ後は，小グループでのグループディスカッションを行い，各グループの発表と全体共有を行った。

また，もうひとつのユニークな試みとして，今回初めてネットワーク配信システムを用い，大学側に待機する大学院生が画面と音声を通じて模擬事例検討会に双方向的参加を行った。実践に非常に近い臨場感あふれる場面を前にしながらの学習の中で，実際に現場に出かけない形式においても，各スタッフの役割や虐待ケースの対応などについての実践的理解を深める可能性が示されたと考える。



## アンケート結果概要（詳細は巻末資料を参照）

### 参加者

20代から30代の年齢層が全体の参加者の7割を占めた。また、半数以上が、保育士や幼稚園教諭、教育関係者など子どもの日常生活に直接関わることの多い支援者であった。

今回の参加者全体のうち、7割の方が7月に行われた講演会にも参加していた。

### 講演会参加の動機の内容

一番多かった回答内容は、日々の業務や支援に関して学びたい、役立てたいというような「自己学習・研修のため」というものであった。テーマを受けて興味関心をもったというものや職場での案内を受けての参加も多く見られた。また、7月の講演会に参加してみて、継続しての学習を望んで、今回も参加した方もおられたようである。

### 講演会への満足度および感想

8割の方から「大変満足」「まあ満足」との回答を得た。具体的な事例を通して参考になったという声や模擬事例の検討の様子から、各職種の役割の理解やケース対応に対する理解を深められたというような声が聞かれた。1割程度の方は、満足度に関して「どちらでもない」との回答であったが、そういった中には、今回設定した事例や検討会そのものが複雑で、勉強不足を感じたという方も複数おられたようであった。

### 臨床心理士に対するニーズ

気になる子どもや保護者に対する対応方法について具体的に教えてもらいたいという意見がほとんどであった。その他にも少数意見として、市町村職員として当たり前心理士が配置されることを求めるものや支援に従事するスタッフへのメンタルケアを求めるものも見られた。



模擬事例検討の様子



グループディスカッションの様子

## 霧島市における支援活動

**日 時：**平成 24 年 1 月 31 日（火） 19：00～21：00

**演 題：**落ち着きがない，トラブルが多いなどの子どもの支援について  
～保護者へのつなぎを悩む事例をとおして～

**講 師：**服巻豊准教授

**会 場：**霧島市すこやか保健センター

**参加者：**87 名（公立保育園保育士，保健師など）

**主 催：**霧島市すこやか保健センター

**共 催：**鹿児島大学大学院臨床心理学研究科

**同行事業スタッフ：**川口智美非常勤臨床心理士，山下明子事務補佐員

### 支援活動の概要

発達障害や子育て支援の領域において，長年，霧島市で地域に根づいた支援活動を行っている服巻准教授であるが，昨年度に引き続いての講演会の実施となった。霧島市では，平成 24 年度より，発達障害を抱える子どもたちを支援するための拠点施設として「こども発達サポートセンター」を開設する予定となっており，地域で子どもたちの支援を実際に行っている職種同士の連携がより大切なものとなってくる。そういった現状を背景に，市の保健師と保育士とのよりよい連携を目指した研修会を行いたいとの要望があり，実現する運びとなった。

講演会の流れとしては，①講義形式の解説，②事例検討という形式ですすめられた。前半の講義の中では，支援を行う上での，保健師・保育士それぞれがもつ役割の特性を整理し，お互いが連携をとりながら，それぞれの役割をどのように活かしていくかということや，子どもたちの発達段階に応じた支援の流れなどについて，スライドを用いながら話がなされた。後半の事例検討会においては，実際に，現場の保育士が保育園において体験したケースが取り上げられたのだが，そのケースを取り巻く環境や子どもの状態像に関する情報を整理していきながら，親の気持ちに対する配慮も視野に入れた支援の必要性などについても解説が行われた。質疑応答の場面では，普段，直接的に子どもたちや保護者に関わる保育士からの日々の対応の難しさが切々と語られ，様々な職種の専門家がうまく連携をとりながら，情報を皆で理解していくことの大切さが共有された。

保健師・保育士合同での研修会というスタイルは霧島市でも初めての試みとなったが，お互いが必要としているニーズを把握し，まずはお互いの顔を知るという意味でも，今後の連携のきっかけとして良い機会となったようである。

## **アンケート結果概要** （詳細は巻末資料を参照）

### **参加者**

今回の講演会は地域で子ども支援に関わる職種の今後の連携を目的として、霧島市の公立保育園の保育士と、保健師を対象にしたものであり、参加者の 7 割が保育士であった。また、参加者の 7 割近くを 40 代 50 代の年代層で占めていた。職歴を見てみても 10 年から 20 年の経験をもつ人が 4 割弱、20 年以上の経験をもつ人も 4 割近くおり、中堅以上の方の参加が多かったことがわかる。

### **講演会参加の動機の内容**

最も多い参加の動機としては、発達障害児・者や支援を必要とする子どもたちに対して、どのような対応をとっていったらよいか学びたいというような「自己学習・研修」を目的とするものであった。また、今回は現場の保育士さんが多く参加していたが、保育園において、発達障害が疑われる子どもや実際に支援が必要な子どもとの関わりが増えている現状もあり、学習の必要性を感じての参加となった人も多かったようである。

その他、保健センターからの案内や講演内容に興味関心をもつての参加という回答が見られた。

### **発達障害事例に対して専門職として対応する自信について**

講義前は、6 割近くが対応する自信は「あまりない」「全くない」という回答であり、「とてもある」「少しある」と答えた人は全体の 2 割にとどまった。講義後において、講演内容から対応する自信をもてたかという質問に対しては、「とてももてた」「少しもてた」という人が 55%、「どちらでもない」という回答が 30%程度であり、約半数の人たちは、対応する自信を高められたようである。

### **連携に必要な他の専門職に関する知識について**

講義前は、他の専門職に関する知識を「たくさんもっている」「少しもっている」と回答した人は 25%程度であり、6 割の人は「あまりもっていない」「全くもっていない」との回答であったが、今回の講演内容を通して、6 割の人は、他の専門職に関する知識を「たくさんもてた」「少しもてた」という意識をもてたようである。

### **発達障害事例への対応に関する専門的知識やスキルの獲得に向けた意欲**

講義前、講義後とも、参加者のほぼ全員が対応に関する専門的知識やスキルを「とても身につけたい」「少し身につけたい」との回答であった。参加者の発達障害児・者に対する支援に向けた意識が非常に高いものであることが見える。

### 他職種との連携に対する意欲

講義前、講義後とも、他機関・他職種との連携について「とても連携したいと思う」「少し連携したいと思う」という回答が9割を超えており、連携の大切さや必要性を参加者の多くが感じていることが窺えた。

### 他機関・他職種と連携をとっていききたいと思う理由について

支援を必要としている当事者に携わる者として、多面的でよりよい支援を目指すためという内容の回答が多数を占めた。また、個人での対応や保育所など1つの場所でのみの対応には限界を感じるために、連携の必要性を感じるというものや、専門家からの助言をもらいたいからという回答も見られた。

実際に保育園で、支援を必要とする子どもたちが増えていると感じる現状も保育士たちの実感としてあり、そういったことも連携を感じる要因として関係しているようである。

### 他機関・他職種と連携をとっていくために必要だと思うこと

参加者の多くが、支援者間で情報を共有していくことや他機関・他職種と日頃から密に交流していくことが特に大事になってくると感じているようであった。また、今回のような研修会を継続的行ったり、個々人が専門性をスキルアップしていくこと、そして連携していくことが予測される他機関・他職種の役割をしっかりと理解していくことも必要であるという声も複数きかれた。

### 講演会への満足度および感想

参加者の満足度は高く、9割の人々から「大変満足」「まあ満足」との回答を得た。講演内容を通して、日頃の支援に対する気づきを得たり、支援に対する理解が深まったとする内容の感想が多く見られた。また、今回保育士と保健師合同の講演会となったが、この形態に対しても参加者の声は好評で、今後も同様の研修会を希望する意見が多数あった。



霧島市講演会の様子

## 枕崎市における支援活動

**日 時：**平成 24 年 2 月 21 日（火） 15：30～17：30

**演 題：**発達障がい児・者への支援について～地域での生活を支える～

**講 師：**服巻豊准教授

**会 場：**社会医療法人慈生会ウエルフェア九州病院

**参加者：**64 名（臨床心理士，教諭，幼稚園関係，PSW，保健師，看護師，行政職，相談支援専門員，MSW，管理栄養士等）

**主 催：**社会医療法人慈生会ウエルフェア九州病院

**共 催：**鹿児島大学大学院臨床心理学研究科

**後 援：**枕崎市，南九州市，南さつま市，鹿児島県南薩地域振興局，  
南薩地区障害者相談支援事業所連絡協議会  
鹿児島県医療ソーシャルワーカー協会南薩ブロック  
鹿児島県精神保健福祉士協会，鹿児島県社会福祉士会

**同行事業スタッフ：**上原美穂特任助教

### 支援活動の概要

枕崎市においては平成 22 年度に講演会を開催したが，地域からの更なる要望もあり，昨年度に引き続いての講演会形式による支援活動となった。今回の講演会の主催であるウエルフェア九州病院では，発達障がいを抱える方やその保護者に対して，地域との各機関と随時連携を図りながら支援を続けてこられているが，地域の各機関との円滑な連携のためには，発達障がいに対する理解を深める必要性を感じているとのことだった。そこで今回は，講演会形式の中で，発達障がい児・者への支援について，各機関や各職種の専門性を活かした役割分担や連携のあり方についてディスカッションができるような研修会を企画する運びとなった。

当日は，ウエルフェア九州病院の臨床心理士である今村智佳子先生と南薩養護学校教諭の肥後有紀先生に病院と学校が連携して対応してきた事例を紹介していただいた。広汎性発達障害の診断を受けている中学生女子の事例で，5 歳の頃から病院と教育機関が連携しながら対応してきた経過を臨床心理士と教諭のそれぞれの立場からご報告いただいた。研修会の後半は，事例の心身の状態や理解の仕方についての解説を服巻准教授が行った。

今回も多職種の対人援助の専門家に参加いただいたが，発達障がい児の気持ちをどのように汲み取っていけばいいのか，気持ちを汲み取った上でどのように支援につなげていけばいいのかを考える機会になったようである。参加者の近隣の関係機関同士の連携の実際について発表いただいたことで，参加者にとってはイメージがしやすく，今後の連携のきっかけになるのではないかと考えられる。

## アンケート結果概要 （詳細は巻末資料を参照）

### 参加者

教育，医療，福祉の領域から，様々な職種の方に参加して頂いた。年代は20代から50代まで，それぞれ23～25％と偏りなかった。参加者の職歴としては，5年未満の方が33％で最も多かった。

### 講演会参加の動機の内容

現場で発達障がい児・者への対応をしているが，「さらに理解を深めたい」と対人援助の専門職としてスキルアップの必要性を感じている方が多かった。また，実際には支援等に関わっていなくても，「周りに気になる子がいるから話を聴いてみたい」など発達障がい児・者への関心の高さが窺われた。

### 発達障害事例に対して専門職として対応する自信について

講義前は，対応する自信は「あまりない」「全くない」が5割強，「どちらでもない」が約3割であった。「とてもある」は一人もおらず，「少しある」と答えた人は全体の2割にとどまった。講義後において，講演内容から対応する自信をもてたかという質問に対しては，「少しもてた」という人が56％，「どちらでもない」という回答が3割程度であり，約半数の人たちは，対応する自信を高められたようである。

### 連携に必要な知識について

講義前は，他の専門職に関する知識を「たくさんもっている」と回答した人は1人のみであった。「少しもっている」と回答した人は4割程度であり，5割の人は「あまりもっていない」「全くもっていない」との回答であった。今回の講演内容を通して，8割の人が，発達障害事例における連携に関する知識を「たくさんもてた」「少しもてた」と実感できたようである。

### 発達障害事例への対応に関する専門的知識やスキルの獲得に向けた意欲

講義前，講義後とも，参加者のほぼ全員が対応に関する専門的知識やスキルを「とても身につけたい」「少し身につけたい」との回答であった。参加者の発達障害児・者に対する支援に向けた意識が非常に高いものであることが見える。講演後，約7割の人が発達障害事例への対応についての知識やスキルを得ることができたと回答していた。このことより，参加のニーズに応じた内容であったことが窺われた。

### 他職種との連携に対する意欲

講義前、講義後とも、他機関・他職種との連携について「とても連携したいと思う」「少し連携したいと思う」という回答が9割を超えており、連携の大切さや必要性を参加者の多くが感じていることが窺えた。

### 他機関・他職種と連携をとっていききたいと思う理由について

支援を必要としている当事者に携わる者として、多面的でよりよい支援を目指すためという内容の回答が多数を占めた。1つの機関のみの対応には限界を感じるため、多機関での連携した支援が必要であるというものや、専門家からの助言をもらいたいからという回答も見られた。また多機関で支援を進めていく中で、一貫した支援を行うためには連携が必要であるという意見があった。

### 他機関・他職種と連携をとっていくために必要だと思うこと

参加者の多くが、支援者間で情報を共有していくことや他機関・他職種と日頃から密に交流していくことが特に大事になってくると感じているようであった。また、今回のような研修会を継続的行ったり、個々人が専門性をスキルアップしていくこと、そして連携していくことが予測される他機関・他職種の役割をしっかりと理解していくことも必要であるという声も複数きかれた。

### 講演会への満足度および感想

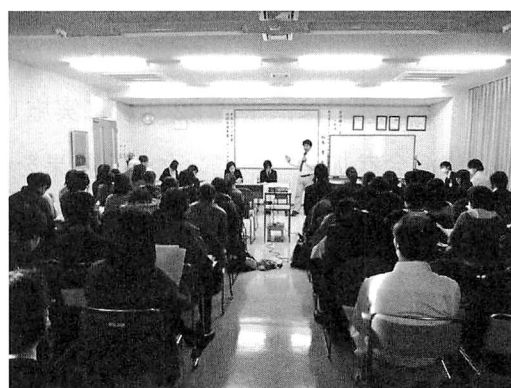
参加者の満足度は高く、8割の人々から「大変満足」「まあ満足」との回答を得た。

今回の講演会を通して、発達障害事例への対応は、その事例の個別性を理解しようとする姿勢や地域の関連機関が連携することが重要であるということが伝わったようである。

また「こういった研修を継続してほしい」など、この講演会が専門職としての学習意欲を高める機会になったことが窺われた。



枕崎市講演会



事例解説

## 第2節 学会発表

### 日本心理臨床学会 第30回秋季大会

開催日時：平成23年9月3日～5日

開催場所：福岡国際センター

出向者：安部恒久教授，中原睦美教授，土岐篤史准教授，服巻豊 准教授

上原美穂特任助教，川口智美非常勤臨床心理士，山下明子事務補佐員

#### 発表1

演題：地域支援の臨床実践と実務教育を架橋した新たな「実践型教育プログラム」の開発

（1）ーデリバリー方式による臨床心理学的地域支援活動ー

発表者：上原美穂・川口智美・土岐篤史・服巻豊・落合美貴子・金坂弥起・中原睦美・  
平川忠敏・松本繁・山中寛・安部恒久

概要：本研究では、地域支援プロジェクトの概要および平成22年度に実践したデリバリー方式による地域支援について発表した。平成22年度は、地域のニーズを把握するため、事業スタッフが地域の対人援助の専門家と情報交換を行い、大学と地域の協働という形で講演会を実施した。講師は専任教員が担当した。講演会の際、参加者に実施したアンケートではいずれも高評価が得られ、その内容を報告した。



#### 発表2

演題：地域支援の臨床実践と実務教育を架橋した新たな「実践型教育プログラム」の開発

（2）ー新規地域との連携をめぐる実践とその留意点ー

発表者：中原睦美・川口智美・上原美穂・土岐篤史・服巻豊・落合美貴子・金坂弥起・  
平川忠敏・松本繁・山中寛・安部恒久

概要：本研究では、平成22年度に実施した講演会の実施に至る経緯と講演会参加者へのアンケート結果を報告し、新規地区へ参入する際の留意点（1. 地域文化の見立て，2. 対象の見立て，3. 教育的関与，4. 関わる側の臨床心理学的柔軟性，5. 一回限定であることの限界性と即応性，6. 受入困難地域への情報発信，7. 参入段階を検討した関与プログラムの策定）について発表した。





### <学会参加者からの質問および感想>

Q. : 本プロジェクトの体制（スタッフ配置等）について

Ans. : 専任教員＋事業スタッフ（特任助教，非常勤臨床心理士，事務補佐）

多くの地域をフォローできるよう専任教員は分担して地域支援の実践を行った。

事業スタッフは，地域のニーズを把握し，地域と専任教員をつなぐコーディネーターとしての役割を担った。

Q. : 地域支援に至るまでの流れについて

Ans. : 発表 1 の内容を説明。地域の専門家との情報交換をする中でニーズを汲み取るなど，基盤作りが重要である。

Q. : 地域支援として講演会という形式をとったのはなぜか

Ans. : 初年度であった平成 22 年度は，将来の授業化に向けて，地域との関係作りが目的であった。地域で活動している対人援助の専門家を対象とした講演会を実施することで，地域からの臨床心理士へのニーズを発掘しながら，専門職大学院としての地域貢献ができると考えた。また平成 22 年度においては単発の支援であったため講演会形式であったが，今後は事例検討会や相談会も検討していく。

### <発表者の印象>

地域支援といった場合に多くの方は，近距離の「地域」を想定されていたが，本プロジェクトでは，大学院を拠点とし，広範囲をカバーする形でデリバリー方式の地域支援の実践している。その点が本プロジェクトの独自性の 1 つであると感じた。（上原美穂）

地域支援を既に実践しているあるいは，これから予定している先生からの質問が目立った。鹿児島大学が想定する地域支援の方向性とは，ニュアンスが異なる面もみられたが，地域支援の実践という観点では類似した課題や関心の高さが認められた。院生教育という観点からの質問も目立った。発表者側が当然のように実施していた手続きなどへの関心も高く，実践に向けては「運用プロセス」も重要な視点であると改めて感じた。（中原睦美）



福岡国際センター ポスター発表会場